

時間：19：00－20：40（100分）

後期 2020年9月28日～ 全10回（祝祭日の講義はありません）

月曜日	社会言語学の<社会>の意味を探究する 社会言語学 <p style="text-align: right;">嶋田 珠巳（しまだ・たまみ） 明海大学教授 【社会言語学】</p>	
	講義概要	今年度は「基礎からしっかりと」がテーマ。どのような背景のもとにこの分野の研究が築かれてきたのか。<社会>は<言語>とどのように関わり、それはどのような言語現象に見ることができるか。言語学理論にどのように<社会>を組み込むことが可能なのか。講義では、社会言語学全体を見渡してこの学問領域の特徴をつかみます。深入りするのには、言語接触、言語変化、社会言語学の理論と実践。すべてにおいて、言語知識と言語使用が考える要になります。初めての方から研究の領域に足を踏み込んでいる方までを想定して、「話者の見える言語学」としての社会言語学の魅力に誘います。
	テキスト・参考文献	教科書は使わず、ハンドアウトを配布します。参考文献は適宜紹介します。
	この課目で前提とされる知識など	特にありません。教室でのディスカッションがあらたな知のきっかけになるかもしれません。
	プロフィール	明海大学外国語学部教授。社会言語学、言語接触、アイルランド英語。2007年京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻言語学専修博士後期課程修了。博士（文学）。著書に、『英語という選択-アイルランドの今』（岩波書店 2016年）、 <i>English in Ireland: Beyond Similarities</i> （溪水社 2010年）、共編著に『言語接触-英語化する日本語から考える「言語とはなにか」』（東京大学出版会 2019年）など。主な論文として“Speakers’ awareness and the use of <i>do be</i> vs. <i>be after</i> in Hiberno-English”, <i>World Englishes</i> 35, 2016年。
月曜日	Langacker の認知文法を用いて具体的な現象の分析する 認知言語学 I —認知文法の基礎 <p style="text-align: right;">西村 義樹（にしむら・よしき） 東京大学教授 【認知言語学入門】</p>	
	講義概要	今年度は、Ronald W. Langacker の認知文法 (cognitive grammar) の基本に立ち戻って、この理論を含む認知言語学がそもそもどういう意味で「認知」的なのか、この理論が言語表現の意味をその言語表現と結びつけた conceptualization であると考えるのはなぜか、この理論が symbolic view of grammar という文法観を重視するのはなぜか、そのような文法観を採用する根拠は何か、そのような文法観によってどのような現象のどのような分析が可能になるのか、この理論は語彙と文法がど

	<p>のような関係にあると考えているのか、等の問いに取り組んでみたいと思います。認知文法による具体的な現象（例えば日英語の受身）の分析を比較的詳しく紹介することによって、この理論の切れ味を示せるようにしたいと考えています。</p>
テキスト・参考文献	<p>講義で用いる文献はこちらで配布します。参考文献は講義中に適宜紹介します。</p>
この課目で前提とされる知識など	<p>（認知文法を含む）認知言語学についての知識は前提としませんが、受講前に西村義樹・野矢茂樹著『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』（中央公論新社）を通読されることをお勧めします。</p>
プロフィール	<p>東京大学文学部（言語学研究室）教授 専門は認知言語学、意味論、日英語対照研究。 1989年東京大学大学院人文科学研究科博士課程（英語英米文学専攻）中退。 『構文と事象構造』（共著、研究社、1998）、『認知言語学Ⅰ：事象構造』（編著、東京大学出版会、2002）、『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』（共著、中公新書、2013）、『明解言語学辞典』（共編著、三省堂、2015）、『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ：生成文法・認知言語学と日本語学』（共編著、開拓社、2016）、『メンタル・コーパス：母語話者の頭の中には何があるのか』（共編訳、くろしお出版、2017）、『認知文法論Ⅰ』（編著、大修館書店、2018）、『認知言語学を拓く』、『認知言語学を紡ぐ』（いずれも共編著、くろしお出版、2019）など。</p>
火曜日	<p>幼児による第一言語獲得についての諸問題を検討します。 第一言語獲得</p> <p style="text-align: right;">佐野 哲也（さの・てつや） 明治学院大学文学部英文学科教授 【言語心理学】</p>
講義概要	<p>ヒトが第一言語を容易に獲得できるのはなぜかという疑問について、それは生まれつきの能力によって助けられているからだという答えが考えられます。このような問いを中心に、この講義では第一言語獲得についての諸問題をあつかいます。</p> <p>最初に、生成文法理論を基礎として、幼児の言語能力を生まれつきのものとそうでないものに分けて考えることを中心に入門的解説をします。そのあとで、幼児による英語・日本語の獲得についての研究の代表的なものを紹介し、実際の研究例のなかで生まれつきの能力がどのようなかたちで研究されているかをみていきます。これらの講義をとおして、幼児言語の分析の基本的な考え方を解説し、ヒトが第一言語を容易に獲得できるのはなぜかという疑問について、幼児言語をとおしてどのような研究ができるかを考えていきます。</p>
テキスト・参考文献	<p>教科書は特に使用せず、スライドをもちいて講義します。</p>
この課目で前提とされる知識など	<p>特にありません。専門的知識を前提とせず、基本からわかりやすく解説します。</p>

プロフィール	<p>明治学院大学文学部英文学科教授 言語獲得 University of California, Los Angeles, Ph.D. in Linguistics 主要著作：“Remarks on theoretical accounts of Japanese children’s passive acquisition,” in <i>Generative Linguistics and Acquisition: Studies in Honor of Nina M. Hyams</i>, John Benjamins, 2013. など</p>
『「する」と「なる」の言語学』再訪 認知言語学Ⅱ	<p style="text-align: right;">池上 嘉彦（いけがみ・よしひこ） 東京大学名誉教授、昭和女子大学名誉教授 【認知言語学】</p>
講義概要	<p>外国語と多かれ少なかれ苦労してつき合った経験のある人なら、誰もその反面、いつの間にか自然と身につけてしまった自分の母語とは一体どういう言語なのかと改めて考えてみたくなるはずです。『「する」と「なる」の言語学』と題された書物（大修館書店、1981）も、そのような問いかけから生まれたもの—エッセイ風の考察と言語学的な論考との中間あたりを念頭に置いての著作でした。変形文法一色に染まっていた時期には異端的な存在と見做されていたらしいのですが、現在まで18刷を重ね、今では認知学的な先駆的試みと受けとめられているようです。本年度は、この書物の成立と、そこで提示されているいくつかの基本的な論点を現時点から見た形で紹介・検討・評価させていただき、併せてその後得られた新しい知見にも言及し、その上で聴講者の方々にもみずからの言語感覚に同じ問いかけをしてみてくださいと思っています。もともと、通年の授業として計画していたものですので、間違いなく来年度に継続と言う形になると思います。</p>
テキスト・参考文献	<p>今回の講義内容と全体的に直接関係する文献・資料としては、次のようなものがあります。</p> <p>(1) 『「する」と「なる」の言語学 : 言語と文化のタイポロジーへの試論』(vii+304pp., 大修館書店、1981) — もともと、1977年9月から1978年8月までの雑誌『言語』(大修館書店)での連載をもとに大幅に加筆・拡張して書物にまとめたもの。ドイツ語訳 (Viktoria Eschbach-Szabo ほか訳: <i>Sprachwissenschaft des Tuns und des Werdens: Typologie der japanischen Sprache und Kultur</i> (x + 11-233pp., Berlin: LIT Verlag, 2007) があります。</p> <p>(2) 「表現構造の比較—<スル>的な言語と<ナル>的な言語」、『日英語比較講座 (国広哲弥編) 第4巻「発想と表現」』(大修館書店、1982, pp. 67-110) — 上記(1)の書物の内容の特に<言語>そのものに関わる部分の叙述を一般読者向きに書き改め、まとめたもの。</p> <p>(3) 「<スル>的な言語と<ナル>的な言語」、池上嘉彦『詩学と文化記号論—言語学からのパースペクティブ』(筑摩書房、1983)の第7章 (pp. 272-340) として収録—上記(2)を部分的に加筆、注を加えたもの。現在では、この書物は、講談社学術文庫 1051(1992; 第7章は pp. 272-340) として刊行されています。なお、</p>

	<p>中国語訳（林璋訳『詩学与文化符号学』（南京：訳林出版社、286pp.））があります。</p> <p>（４） “ ‘D0-language’ and ‘BECOME-language’ : Two Contrasting Types of Linguistic Representation” , in Yoshihiko Ikegami, ed. (1991), <i>The Empire of Signs: Semiotic Essays on Japanese Culture</i>, Amsterdam: John Benjamins, pp. 285-326 — 日本語を母語としない読者を想定しておおむね（２）の枠組みにその後の考察を加えつつ、執筆したもの。</p> <p>（５）NHK テレビ第３チャンネル（当時）：「現代ジャーナル・シリーズ日本語：（１）＜する＞と＜なる＞はどう違う？、（２）＜もの＞と＜こと＞、そして＜ひと＞、（３）わかりやすい表現とあいまいな表現 — ４５分番組として、１９９１年２月２５日、２６日、２７日放映されたものです。</p> <p>講義では、上記文献（２）をコピーで共有していただき、それに沿って説明を進めながら、時に文献（１）、（４）からも補足します。取り上げる個々の問題については、その都度、必要に応じて関連文献・資料を別にハンドアウトとして用意、配布します。（５）の映像資料もDVDから適時利用してみます。</p>
<p>この課目で前提とされる知識など</p>	<p>日本語母語話者でなくても、日本語に特別な関心があり、そして（当然ですが）ある程度の習熟度のある人なら、歓迎です。（文献（４）の併用も考えられます。）なお、文献（１）の副題（「言語と文化のタイポロジーへの試論」）からも読み取っていただけるように、話は言語学がもつぱらの対象とする＜日常的な言語＞の域にとどまらず、時には、一方では質的にそれを越えての創造的な営みとしての＜詩的＞言語、他方では量的にそれを越えての人間の＜文化＞的な営みの諸相にまで広がります。前者は現代的な意味での＜詩学＞（poetics）、後者は狭義の＜ことば＞に限らず、あらゆるモノ・コトに＜記号＞（つまり、ヒトに何らかの＜意味＞を読み取らせる媒体）としての機能（semiosis）を見てとる現代の＜記号論＞（semiotics）— とりわけ、今回の講義では＜文化記号論＞（semiotics of culture）— と呼ばれる分野にまで、多少は立ち入ることになるはずですが。これらの分野についても予備知識も差し当たっては必要ありませんが、知的好奇心があるということでしたら、前者に関しては例えば『ことばの詩学』（池上嘉彦、岩波書店）とか、上記文献（３）。後者に関しては『記号論への招待』（池上嘉彦、岩波新書258）、『文化記号論への招待』（池上嘉彦・山中桂一・唐須教光、講談社学術文庫1137）、などに当たってみて下さい。講義の途中で時間的な余裕があれば、近い関心の指向性を有するように見える ‘folk linguistics’（e.g. N. A. Niedzielski and D. R. Preston, eds. <i>Folk Linguistics</i>, Mouton de Gruyter, 2000）、‘ethnolinguistics’（e.g. N. J. Enfield, ed. : <i>Ethnoyntax</i>, Oxford University Press, 2002）、‘cultural linguistics’（e.g. F. Sharifian: <i>Cultural Linguistics</i> (John Benjamins, 2015)）のような試みも少しはのぞいてみたいと思います。これらは緩やかな意味での＜言語人類学＞（linguistic anthropology）に統合されうるものとして、そのさらに背後には＜文化人類学＞（cultural anthropology）の限りなく豊かな沃野が広がっているという展望になるでしょう。</p>

	プロフィール	<p>東京大学名誉教授、日本認知言語学会名誉会長</p> <p>東京大学で英語英文学(B. A., M. A.)、Yale 大学大学院で言語学(M. Phil., Ph. D.)を専攻。インディアナ大学、ミュンヘン大学、ベルリン自由大学、チュービンゲン大学、北京日本学研究中心、などで客員教授、ハンブルク大学、ロンドン大学、などで客員研究員。著書：『英詩の文法』、『意味論』、『「する」と「なる」の言語学』、『ことばの詩学』、『詩学と文化記号論』、『記号論への招待』、『<英文法>を考える』、『日本語と日本語論』、『自然と文化の記号論』、『英語の感覚・日本語の感覚』など。</p>
水曜日	<p>言語に関連するテーマを多角的に取り上げる</p> <p>言語学入門</p>	<p style="text-align: right;">大津 由紀雄 (おおつ・ゆきお)</p> <p style="text-align: right;">関西大学客員教授・慶應義塾大学名誉教授</p> <p style="text-align: right;">【言語学入門】</p>
	講義概要	<p>言語学についての簡単な総説的講義 (たとえば、音声学と音韻論はどう違うのか、統語論とはなにか) に引き続き、言語学に関連するいくつかの話題を取り上げて、解説します。取り上げる予定の話題は「ことばと認知」「ことばとその運用---とくに、統語解析」「ことばと人工知能」です。このコースの目的は受講者に言語学のおもしろさとその重要性を感じ取ってもらうことにあります。基本的に講義形式をとりますが、できるだけ演習的要素も取り入れたいと思っています。</p>
	テキスト・参考文献	<p>必要に応じて配布します。</p>
	この課目で前提とされる知識など	<p>旺盛な知的好奇心。言語学、心理学、認知科学などに関する知識は前提としません。学部生、院生、研究者、教員、一般社会人など広い範囲の受講者が集まることを希望します。</p>
	プロフィール	<p>関西大学客員教授、慶應義塾大学名誉教授。</p> <p>日本認知科学会フェロー。言語の認知科学 (生成文法、言語心理学)、メタ言語能力を基盤とする言語教育。Ph. D. (MIT)。最近の著作に、今西典子・大津由紀雄. 2017. 「時間表現の発達---時間の言語化にみられる普遍性と多様性の観点からの考察」<i>Brain and Nerve</i> 69(11) 1251-1271、大津由紀雄. 2016. 「ことばについて知ることの大切さ」『日本語学』35(2) 2-12、大津由紀雄. 2015. 「ことばの認知科学」<i>Clinical Neuroscience</i> 38(3) 877-881 などがある。</p>
水曜日	<p>語の文法を解き明かす -- 「ギャン泣き」「食べたみ」はどうやって造られる？</p> <p>形態論・語形成論</p>	<p style="text-align: right;">杉岡 洋子 (すぎおか・ようこ)</p> <p style="text-align: right;">慶應義塾大学教授</p> <p style="text-align: right;">【形態論・語形成論】</p>
	講義概要	<p>言語は特定の形によってある意味を伝えるものですが、その「形」の最小単位は「語」です。講義では、形態論の基礎的な概念を説明した上で、複合語「歩きスマホ」「ギャン泣き」や派生語「ばえる」「食べたみ」などを造り出す語形成について、形と意味の規則性と例外をどう説明できるか、言語間の違いなどを学びます。そして、レキシコン (=頭の中の辞書) についての理論的な知見も活用しながら、</p>

	<p>語という単位に潜む豊かな文法と意味を解き明かします。主要なトピックには、次のようなものがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・語という単位の独立性はあるのか（「甘酒」は「甘い酒」にあらず） ・語の構造は句や文の構造とどう違うのか（「もの忘れ」と「忘れもの」） ・語形成の生産性と心内辞書の関係（「食べたみ」のインパクト） ・品詞の意味カテゴリーとプロトタイプ（「元気な」と「?病気な」） ・品詞を転換する派生接辞の意味と機能（「?食べるがない」） ・レキシコンと意味の生成（「ボトルを飲んで捨てる」の多義） ・動詞の意味のしくみ（「死んでいる」と dying の違い） ・複合語の多様性（「ギャン泣き」「インスタ映え」「歩きスマホ」） <p>講義が一方通行にならないように、質問やコメントを歓迎します。また、課題について議論する機会も設ける予定なので、積極的に参加して自分で言語データを集めて分析する楽しみも味わってください。</p>
テキスト・参考文献	<p>テキスト：プリントを配布します。</p> <p>参考文献：窪菌晴夫編『よくわかる言語学』（ミネルヴァ書房、2019）他、必要に応じて文献を紹介します。</p>
この課目で前提とされる知識など	<p>専門的な予備知識は特に必要ありません。</p>
プロフィール	<p>慶応義塾大学 経済学部教授（英語・言語学）2020年4月より同大学名誉教授。</p> <p>シカゴ大学大学院言語学科博士課程修了(Ph. D.) 語形成や語彙意味論, 形態論と統語論の関係, 語の処理に関わる心や脳のしくみを研究しています。</p> <p>『語の仕組みと語形成』（共著、研究社、2002）、『名詞の意味と構文』（分担執筆、大修館、2011）、「語の処理の心的・脳内メカニズム」（共著、『形態論』、朝倉書店、2016）、「形態論・語形成」（『よくわかる言語学』ミネルヴァ書房、2019）など。</p>
意味とのインターフェイスから統語論を考える 生成文法Ⅱ	<p style="text-align: right;">高橋 将一（たかはし・しょういち） 青山学院大学教授 【生成文法】</p>
講義概要	<p>本講義では、意味部門とのインターフェイスの観点から統語部門を考えることで、統語部門についてどのような結果を得られるかを検討していきます。まず、意味部門で解釈可能な統語構造とはどのようなものであるかを考え、解釈可能な統語構造を想定した上で、移動が示す特徴や移動元に残されている統語的要素の性質について考えていきます。また、量化詞の作用域の可能性と意味解釈の関係や削除の認可条件における意味解釈の役割などについても議論することを予定していますが、取り上げる言語現象については、可能な限り、受講者の興味・関心を考慮したいと思います。</p>

<p>テキスト・参考文献</p>	<p>Takahashi, Shoichi. 2019. Putative null pronominals in English: Causes and consequences. <i>Studia Linguistica</i> 73:650-682.</p> <p>Takahashi, Shoichi and Sarah Hulsey. 2009. Wholesale late merger: Beyond the A/Ā-distinction. <i>Linguistic Inquiry</i> 40:387-426.</p> <p>その他の文献については、講義の際にご紹介します。</p>
<p>この課目で前提とされる知識など</p>	<p>生成文法の入門書の内容程度の知識を前提とします。</p>
<p>プロフィール</p>	<p>青山学院大学文学部英米文学科教授 統語論、意味論、統語論と意味論のインターフェイス 2006年マサチューセッツ工科大学大学院博士課程言語学・哲学科修了、Ph.D. 主要論文： The hidden side of clausal complements. <i>Natural Language & Linguistic Theory</i> 28:343-380、More than two quantifiers. <i>Natural Language Semantics</i> 14:57-101 など。</p>
<p>「なぜ」を問うところから理論的思索が始まる。 日本語文法理論</p> <p style="text-align: right;">尾上 圭介（おのえ・けいすけ） 東京大学名誉教授 【日本語文法理論】</p>	
	<p>○肯定文と否定文で「ハ」と「ガ」をめぐる非対称性がある（「2月に雪が降る」vs「2月に雪は降らない」）のは何故か。 ○主語表示において「～ハ」の方が圧倒的に自然な文（形容詞文）と「～ガ」でも自然な文（動詞文）とがある。何故か。○モノの存在を語る文では存在物が主語として現れる言語（日本語など）と目的語として現れる言語（中国語など）とがある。何故か。そもそも主語とは何か。意味の問題か、統語の問題か、それとも？ ○文に主語と述語があるのは何故か。 ○動詞シヨウ形に推量でも意志でもない用法（「あろうはずもない奇跡を…」 「校長先生ともあろう人が…」）がある。何故か。推量という意味はシヨウ形という形態自身に内在しているのか、それとも？ ○「あろうか？」という疑問文述語はありうるのに「あるかもしれないか？」という形はありにくい。何故か。 ○運動の進行中を表すテイル（「鳥が飛んでいる」）と運動の既実現や実現結果の状態を表すテイル（「とっくに気がついていて」「ガラスが割れている」。パーフェクト用法と呼ばれる）がシテイル形という同一形式で実現されるのは何故か。（そんな外国語は聞いたことがない。） ○何語でも、述語にはテンスとモダリティがある。何故か。○平叙文も疑問文も感嘆文も命令文も、すべて文であると言えるのは何故か。○文であるとは、言語行動の問題か、意味の問題か。 ○いわゆる受身文では、動作的事態であるのに（動作対象項など）動作主以外のものが事態認識の中核（それが主語の本質）に立てられる。それは何故か。受身文とはそういうものだけでは答えにならない。 ○可能の文や自発の文でも動作主以外の項が主語になる。それは何故か。 ——「そういうものだ」で済まさないで、「何故」を問うところから文法の理論的</p>

		思索が始まります。
	参考図書	必要な文献は、授業の中で紹介し、配布します。
	この課目で前提とされる知識など	特に必要ありません
	プロフィール	大阪市生まれ。東京大学大学院修士課程修了。国語学。専攻は文法論、意味論、および「大阪のことばと文化」。日本笑い学会理事。 著書に『文法と意味Ⅰ』（くろしお出版、2001）、『大阪ことば学』（岩波現代文庫、2010）、『朝倉日本語講座第6巻（文法Ⅱ）』（編著、朝倉書店2004）、日本語文法学会編『日本語文法事典』（共編、大修館書店2014）。
金曜日	スクリプトを使いこなし音声学を学ぶ 実験音声学	北原 真冬（きたはら・まふゆ） 上智大学外国語学部教授 【音声学】
	講義概要	音声分析ソフトウェア Praat を用いて、実験音声学の基本を身につけ、自ら実験をデザインし、それを実施できるようになることを目指します。ノートPCとヘッドホンを持ち込んでいただくことが必須となります。産出と知覚の双方について様々な実験デザインの基本形を示し、それを実行・解析するために必要なスクリプトプログラミングの仕方を基礎から丁寧にお伝えします。
	テキスト・参考文献	テキスト：北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳(2017)「音声学を学ぶ人のためのPraat入門」ひつじ書房 参考文献：授業の中で適宜・紹介します
	この課目で前提とされる知識など	PCの基本的な使い方（拡張子を表示できることや全角スペースを駆逐できること）
	プロフィール	上智大学外国語学部教授。上智大学国際言語情報研究所音声学研究室長。専門は音声学・音韻論・認知科学。1997年京都大学大学院文学研究科言語学専攻博士課程中退。2001年インディアナ大学大学院博士課程修了。joint Ph.D. in Linguistics & Cognitive Science。著書は本講座のテキスト。
	ことばへの気づき (metalinguistic awareness) を考える ことばの気づき：研究成果の批判的検討と今後の課題	大津 由紀雄（おおつ・ゆきお） 関西大学客員教授・慶應義塾大学名誉教授 【言語学特殊講義】
	講義概要	わたくしたちは母語の知識を持っており、その知識を使って言語理解や言語産出などの運用を行っています。母語の知識は子どもの成長とともに発達していきますが、並行して、その知識についての気づき（「ことばへの気づき (metalinguistic

	<p>awareness) 」) も発達していきます。</p> <p>ことばへの気づきとその発達と言語学的関心に留まらず、広く認知科学的にも興味深いテーマであり、さらには、教育との関連においても重要な視点を提供します。</p> <p>ことばへの気づきとその発達に関する研究は1980年代にDavid T. Hakes やWilliam E. Tunmer らの先導により、多くの研究が誘発され、豊富な成果がもたらされました。ただ、わたくしの見る限り、その後は進展のペースが鈍ってきたように思います。この講義では1980年代の研究成果を批判的に検討し、その後の研究の停滞の原因を考え、そして、今後の研究課題について整理するつもりです。</p>
テキスト・参考文献	必要に応じて配布します。
この課目で前提とされる知識など	旺盛な知的好奇心。言語学、心理学、認知科学などに関する知識は前提としません。学部生、院生、研究者、教員、一般社会人など広い範囲の受講者が集まることを希望します。
プロフィール	<p>関西大学客員教授、慶應義塾大学名誉教授。</p> <p>日本認知科学会フェロー。言語の認知科学(生成文法、言語心理学)、メタ言語能力を基盤とする言語教育。Ph. D. (MIT)。最近の著作に、今西典子・大津由紀雄. 2017. 「時間表現の発達---時間の言語化にみられる普遍性と多様性の観点からの考察」<i>Brain and Nerve</i> 69(11) 1251-1271、大津由紀雄. 2016. 「ことばについて知ることの大切さ」『日本語学』35(2) 2-12、大津由紀雄. 2015. 「ことばの認知科学」<i>Clinical Neuroscience</i> 38(3) 877-881 などがある。</p>